Ⅱ　授業研究会

群馬県高等学校教育研究会音楽部会「令和元年度第１回授業研究会」

日　　時	令和元年　９月１９日（木）
会　　場	利根沼田学校組合立利根商業高等学校
教科・科目	芸術科・音楽Ⅰ
題 材 名	音色や奏法を工夫して ギターアンサンブルを楽しもう
指 導 学 級	国際経済科　３年３組
授 業 者	小川　唯佳　教諭

１　開会行事

（1）　挨拶

①大熊　信彦　先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

ちょうど１ヶ月前、夏季研究会が行われた。新学習指導要領の趣旨を理解するとともにギターを用いた授業展開の検討が行われた。今日の授業はその延長線上にある。本日の授業は、指導案を見てもとても内容が濃いものになっている。ぜひ、実りの多い研究会にしてもらいたい。

②福原　佐知子　先生（利根沼田学校組合立利根商業高等学校校長）

群馬県最北端の学校、自然に大変恵まれている。本校は学校組合立であることが特色である。その特性から、施設が特に恵まれている。学校紹介パンフレットにもある通り、約２万坪の敷地の中に寮をはじめ、様々な施設が完備されている。県立に移管せず、組合立の学校として存続させるために尽力している。本校の生徒層に幅があり、国公立を目指す子もいる。部活も勉強も頑張れる生徒を育てていきたい。普通科も募集を始め、これからも更なる発展のため尽力していく。

③島田　聡　先生（群馬県教育委員会高校教育課指導主事）

各学校で諸行事があり慌ただしい中、多くの先生方の参加により授業研究会が開催され、計画的・継続的に授業改善に取り組んでいただいていることに感謝申し上げる。

本日の授業は、夏季研究会での協議で先生方からいただいたアイディアを取り入れつつ、本題材の学習を通じて利根商の生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるかという視点で、生徒の実態に合った様々な工夫がなされているようである。また、学習評価については、令和４年度までの移行期間中は、現行の学習指導要領に基づき４観点での評価を実施することとされているが、学習指導案に示されているように、新学習指導要領に基づく３観点での評価規準の設定と評価を試行していただいている。以上のような夏季研究会と授業研究会との有機的な関連による相乗効果や、３観点での学習評価の提案などは、本部会が教育研究会として常に先を見ながら実直に教育研究に取り組んでいただいている証であり、重ねて感謝申し上げる。

授業前に一点、「指導と評価の一体化」の視点から、授業を拝見する前に本時の学習について、指導案を確認しておきたい。

指導案の３～４ページを見ると、本時の学習は、

○　「カノン」の原曲を聴取し、形式の働きを感受し、カノンという楽曲の形式について理解する。

○　通奏低音部分と旋律部分を同時に演奏し、音の重なりを感じる。

とある。前半の知覚・感受をねらう学習については、「思考・判断・表現」の観点から、評価規準の①として「『カノン』の形式、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受している。」を見取り、後半の器楽表現に取り組む学習については、「主体的に学習に取り組む態度」の観点から「音や音楽、音楽文化と豊かに関わり主体的･協働的に表現の学習活動に取り組もうとしている。」について見取る。つまり、形式やテクスチュアの働きによる特質や雰囲気を感受し､感受したことに基づいて器楽表現をすることによって楽曲の構造の理解につなげ、主体的・協働的な学習のよろこびや楽しさを味わう「生徒の姿」を実現しようという指導者のねらいが見えてくる。

本日は、小川先生と生徒の皆さんの姿から、たくさん学ばせていただきたいと思う。

（2）授業説明（小川教諭）

男女各２０名で構成。最後の国際経済科である。８、９割の生徒が中学校まででギターに触れている。意欲も高い生徒が多い。第３次１時間目が本時である。第１次では「きらきら星」の旋律を、楽譜を読むのではなく、ギターを弾きながら自由に音さがしをして完成させる活動を行った。その中で、どの音からでも始められることを知り、曲にはいろいろな調があることを感じさせた。次の時間ではギターの種類と音色の違いを見出す活動を行った。知識構成型ジグソー法を用いた音色や奏法の追究をした。なかなか違いや改善方法を見出せない生徒もいたが、生徒間で協力しながら学びを深める姿がみられた。第２次では、「カノン」をとりあげ、カノンの形式の特徴を理解しながらギターの奏法に関して学びを深めた。その上でカノンをアンサンブルし、その中で大切なことは何かを考え演奏をより良いものにしていくのが本時の主な活動である。カノンについて音源を聴き、楽譜を見ながら理解を深める。続いてカノンの通奏低音について考え、音源を聴きながら理解していく。生徒の様子を見ながら、演奏する側、聴く側を明確にして授業を進めていきたい。今後の授業改善につなげていきたい。

（3）授業研究係より

総会時に提案した「授業研究の視点」を意識しながら参観していただきたい。なお、授業後の授業研究ではそれらの視点を踏まえた意見交換を行う。

「授業研究の視点」

共通	本時における学習内容は、「新高等学校学習指導要領」におけるどの「指導事項」と関連するか
選択	１　本時の学習目標を達成することで、どんな「育成を目指す資質・能力」が身に付くか
	２　本時の展開で、「主体的・対話的で深い学び」となっていた場面はどこか

２　研究授業　　指導案参照

３　授業研究

（1）授業者より趣旨説明等（小川教諭）

いつもと違う雰囲気で生徒も驚き気味だったがよく活動してくれた。最初と最後の演奏の違いを感じられたのではないかと思う。形式・テクスチュアについては早めに感じ取れていた。「音を重ねることに関して気をつけるべきこと」についての問いが漠然としてしまった。気づきの視点を絞った方がよかったか、ご意見いただきたい。前回は就職試験等でいなかった生徒も多く、アンサンブルをつくること自体に集中しすぎてしまった面もある。新学習指導要領では、主体的な学びあいが重視される。教師側のまとめ上げに偏ることなく、生徒どうしでの学びあい、周りと協力して演奏を完成させていく流れにできるように指導を工夫した。通奏低音に関する箇所で、もう少し指導法を改善したい。皆さんにご意見いただきより良い指導方法を考えていきたい。

（2）研究協議

グループ協議及び発表

１班：斎藤（沼女）、野口（大間々）、井上（藤岡中央）、五十嵐（長野原）

研究協議の視点：　本時の展開で「主体的・対話的で深い学び」となっていた場面はどこか

・「カノンを演奏する際に気を付けるべきこと」理想の答えはなにか
　→通奏低音を軸に演奏する、他者の演奏を聴きながら演奏する、などが書けるとよい
・通奏低音に結び付けることは難しく、むしろパートの重なり合いに着目すればよかったのか
　→通奏低音があることによって安定感が増すことを気づかせたかった
・初めの部分が、通奏低音というよりは前奏というイメージが強くなってしまったのではないか
・問いかけの着地点が明確になっているとよい
・カノンを最初に聴いたときに気づいたことが、教師のねらいとずれがあった（楽器の音色について着目していた）生徒もいたので、聴くときのポイント（旋律に着目等）を伝えるとよいのではないか
・単旋律とカノンの違いに対して問いが深められるのではないかと感じた
・カノンの特徴を協働的に考えられるとよかった
・グループで活動する時間がもう少しあると、もっといろいろな意見が出たかもしれない
・旋律が弾けたことに対しての達成感が大きくなりすぎてしまった
・クラシックギターの基本的な奏法の習得をいかにするかは各校の課題である
　→演奏の姿勢については、今回生徒同士でジグソー法を用いて生徒に考えさせた

２班：坂本（県教育課）、戸松（吉井）、鈴木（桐生南）、木部（太田フレックス）、勝山（前橋商業）

研究協議の視点：本時の展開で、「主体的・対話的で深い学び」となっていた場面はどこか

・４人グループの活動は、役割を自分たちで考えて役割を果たすために各自が取り組んでいた
・教室の関係もあるが、机間指導がしやすいように工夫してもよい
・最前列の生徒とは積極的に対話していたが、後列の生徒は置いていかれてしまっていたので、座席をローテーションする等の工夫も必要
・基本的な奏法などに関しては言葉かけが教員側からあってよかった
・「他者との調和」ということを考えたときに、２分音符の多い曲は良い教材だった
・「カノン」のテクスチュアに関して知覚はできていたが、感受まではいかなかった
・カノンというものを理解するだけなら声（歌）でアンサンブルでも成り立つが、声ではなくギターを用いる意味を明確にするためには、「音色」や「奏法」など音楽を形づくっている要素やそれに準じた言葉を先生が発問

のときに用いる必要があったかもしれない
・カノンを演奏する際に気をつけるべきことに「音を合わせる」という意見が出たが、具体的に何を合わせるのか、「リズム」「高さ」など音楽の要素を用いながら教師が支援するとより明確になったかもしれない
・「カノン」を取りあげる理由は？
　→　各パートの難易度が変わらない。だからこそ演奏上で考えることができる。「第３の男のテーマ」だと、パートごとの旋律の特徴が違うため他者を感じにくい

３班：近野（清明）、青柳（桐生女子）、東（前橋）、松平（尾瀬）、大小原（高高特）

研究協議の視点：どんな「育成を目指す資質・能力」が身に付くか
・音の重なりはよく感じられていた
・生徒たちが音をよく聴きながら演奏しており、教員側も手拍子をとらず、演奏者が音をしっかり聴ける機会をつくっているのが分かった
・「カノン」を自分たちで少しずつ演奏したのが効果的で、メロディー、音の重なりが実感できた
・参考音源の選定意図は？
　→　旋律に集中してほしかったためチェンバロがなるべく入っていないものを選定した
・「聴きやすくなった」という意見をもう少し深めたかった
・生徒たちが演奏する際に気を付けることをどの位置で設定するかを明確にしたい
・タブ譜をしっかり理解して演奏ができていた
・「きらきら星」を様々な調で練習したのは聴音の訓練になり良いと思う
・「〇弦〇フレット」の指示で指が動くのは素晴らしい

４班：須田（吉井）、富岡（安中総合）、橋詰（太田女子）、引田（市立太田）、西田（赤城特支）

研究協議の視点：どんな「育成を目指す資質・能力」が身に付くか
・手拍子等をとらないのはとてもよい
・用語としての「カノン」と曲名としての「カノン」は使い分けているのか
　→「カノン」とカノンで使い分け
・目標に対しての明確なゴールが見えてくるとよかった
・グループ活動のねらいを明確にしたい
・「かえるの合唱」を実際に歌うことで、カノン形式への気づきがスムーズになるのではないか
・ＩＣＴは有効に活用されており、生徒にとってわかりやすい工夫がされていた

・通奏低音の役割についてどの程度扱っていくのか、最終的な演奏では何にこだわって演奏させるのか、今後の授業展開に興味がわいた

４　指導・助言等

（1）島田　聡　先生（群馬県教育委員会高校教育課指導主事）

本日の小川先生の授業は、発問に対する生徒の発言に再度問いかけ、生徒の発言が授業を進めるエネルギーとなっていた。発言した生徒の名前を示しながら授業を進めることで、自分自身が授業に貢献できたという自己有用感が生まれる。また、生徒の発言を先生が受容することで、他者の意見を受容する態度を先生自ら示すという生徒指導的にも意味のあることであるし、生徒の発言がクラス全体の学びにつながることで「私もそういった発言をしよう。」という気持ちを醸成していた。

発問の具体的な内容として、生徒の発言に再度先生が問いかける活動から「通奏低音」や「カノン」の定義を導き出していた。「通奏低音はいつからなっていた？」との発問に「最初からなっていた。」と生徒は答え、「いつまでなっていた？」と再度の問いに「最後までなっていた。」と答えた。このやり取りにより「通奏低音」は最初から最後まで鳴り響く低音であることを導いた。また、「カノンを聴いて気付いたことはある？」との発問に「カエルの歌」と生徒は答え、「カエルの歌ってどういうこと？」と再度の問いに「増えていく感じ。繰り返している。」と答えた。問いを重ねる事で「カノン」という様式の定義に近付いていった。実際に「カエルの歌」を歌う活動を設定すると、さらに生徒が体験的に理解することができ、カノンが生み出す質感がより身近なものになっただろう。問いに対する思考が新たな問いを生み、問いを重ねることで生徒は思考を深めていた。

グループ協議においても指摘されていたが、クラス全体で演奏する際、メトロノームや手拍子などで音を合わせると、生徒は音を聞くことよりも右手と左手を動かし音を出す技能に集中してしまいがちであるが、小川先生は敢えて拍子をとらずにぐっと堪えたことで、生徒の中に音を合わせようという気持ちが生まれ、奏でた音そのものを学習対象とできていた。また、TAB 譜をパワーポイントで提示し、生徒が２分間という短い時間で譜読みし、演奏できていたのは、生徒が TAB 譜をきちんと理解しているという生徒理解があってのことと感心した。

「カノン」を聴いた際、生徒は「どんどん音が増えていく」「結婚式に流れているようだ」とワークシートに書いていたため、新学習指導要領の事項イの（ア）「曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景との関わり」も含めて指導することも可能と考える。その解説には「曲想と音楽の構造、文化的・歴史的背景との関わりについて理解するためには、〔共通事項〕と関わらせた指導によって、生徒が曲想を感じ取り、感じ取った理由を音楽の構造や文化的・歴史的背景の視点から自分自身で捉えていく過程が必要」とある。生徒は、自分自身が抱いている結婚式の厳かで清らな雰囲気を「カノン」の曲想から感じ取っているということであり、「カノン」の音楽的構造と文化的・歴史的背景の視点との関わりを捉えていく学習展開に繋げることもできるだろう。

（2）授業者より補足等

生徒がギターを弾いている時間が、音に集中して演奏できたのが良かった。拍子をとったり声を出したりせずにぐっとこらえたことで、生徒は音に集中し自分たちで音楽を繋ぐように頑張っていた。これからも生徒が音に集中できるような授業を心がけたい。

５　閉会行事

（1）挨拶

大熊　信彦　先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

本日の授業展開の素晴らしさがあってこそグループ協議や全体協議が深まった。参加した先生方の協力のおかげで有意義な第１回授業研究会となった。音楽部会後期の行事にも、沢山の先生方の参加や協力をお願いしたい。秋から冬にかけて学校は忙しくなるので、健康には十分に留意していただきたい。

６　参加者（敬称略　順不同）

大熊　信彦（太田女子）	清水　郁代（吉井）	島田　　聡（高校教育課）	坂本　　将（県教委）
須田　諭美（吉井）	小川　唯佳（利根商業）	東　　善峰（前橋）	黒岩　伸枝（高崎）
野口　瑞穂（大間々）	鈴木香奈子（桐生南）	青柳　　亮（桐生女子）	大小原美幸（高高特支）
松平　康子（尾瀬）	斎藤真里奈（沼田女子）	勝山　英城（前橋商業）	藤嶋　啓子（関学附）
近野　裕子（伊勢崎清明）	五十嵐桃子（長野原）	木部　　誠（太田フレ）	引田　麻里（市立太田）
西田えりか（赤城特支）	富岡　恵美（安中総合）	橋詰　詩織（太田女子）	戸松　久実（吉井）
井上　春美（藤岡中央）			

文責：斎藤真里奈（沼田女子）井上春美（藤岡中央）

芸術科「音楽Ⅰ」　学習指導案

日　時：令和元年９月１９日（木）５校時
対　象：国際経済科３年３組　４０名
授業者：利根沼田学校組合立利根商業高等学校
　　教諭　小川唯佳
場　所：音楽室

Ⅰ　主　　題　　音色や奏法を工夫してギターアンサンブルを楽しもう

１　考　　察

（１）題材観

この題材は、新高等学校学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」Ａ表現（２）器楽

ア　器楽表現に関わる知識や技能を得たり、生かしたりしながら、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫すること。

イ（イ）曲想と楽器の音色や奏法との関わり
　（ウ）様々な表現形態による器楽表現の特徴

ウ（ア）曲にふさわしい奏法、身体の使い方などの技能
　（イ）他者との調和を意識して演奏する技能
　（ウ）表現形態の特徴を生かして演奏する技能

を指導するものである。

私たちの生活において、ギターは身近な楽器の一つである。日常の生活の中で聴こえてくる、ロックやポップス曲などによって、生徒のエレキギターやアコースティックギターに対する興味関心は高い。多くの生徒は、中学校音楽科においてギターを扱う器楽表現の学習をしているが、弾けるようになったと実感できている生徒は決して多くない。

本題材では、クラシックギターの音色や奏法の特徴を理解し、他者との調和を意識しながら、表現形態の特徴を生かして、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫して演奏する。本題材の学習を通して、卒業後、ギターに触れた際、楽器のよさや美しさなどを感じ取り、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養いたいと考え、本題材を設定した。

（２）生徒の実態

ア　知識及び技能

多くの生徒が中学校音楽科の学習でギターを演奏している。しかし、その奏法と音色の特徴について理解し、十分な演奏技能をもつ生徒は少ない。また、１学期に音符や休符の長さについての楽典的内容の学習を行ったが、読譜や記譜について苦手意識をもつ生徒は少なくない。

イ　思考力、判断力、表現力等

１学期は、主として歌唱の題材とリズムアンサンブルを扱う題材において、表現領域の学習

に取り組んだ。歌唱の題材では、イタリア歌曲「'O sole mio」について互いに聴き合ったり、実際に歌ってみたりしながら、楽曲にふさわしい発声について考えたり、歌詞の内容と曲想を関わらせてアゴーギクに取り組んだりして、自己のイメージをもって歌唱表現を創意工夫することができた。リズムアンサンブルを扱う題材では、「Plymouth Rock」についてグループ内で教え合ったり、他のグループの演奏を聴いたりしながら、楽曲の構成を理解し、リズムをそろえて演奏することができた。

ウ　主体的に学習に取り組む態度

３年生国際経済科男子２０名、女子２０名、計４０名のクラスである。全体として学習に対する意欲は高く、与えられた課題や目標に対して真面目に取り組むことができる。１学期に行った歌唱やリズムアンサンブルの学習では、互いに歌い合ったりリズムを教え合ったりするなど、主体的に学習に取り組もうとする様子が見られた。一方で、指示が与えられてから動く生徒も多く、自らの学びの状況を捉え、学びを調整する態度の醸成が必要である。

２　題材の指導目標

クラシックギターの音色や奏法の特徴を理解し、他者との調和を意識しながら、表現形態の特徴を生かして、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫する。

３　題材の評価規準

知識・技能	知①曲想とギターの音色や奏法との関わり、様々な表現形態による器楽表現の特徴について理解している。 技①ギターの奏法、基本的な身体の使い方、他者との調和を意識して、表現形態の特徴を生かした演奏をする技能を身に付けている。
思考・判断・表現	①「カノン」の形式、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受している。 ②知覚したことと感受したことの関わりについて考え、自己のイメージを持ってギターの演奏やギターアンサンブルを創意工夫している。
主体的に学習に取り組む態度	①音や音楽、音楽文化と豊かに関わり主体的・協働的に表現の学習活動に取り組もうとしている。

※　本題材では、新学習指導要領に基づき３観点での評価規準の設定と評価を試行する。

４　指導方針

第１次では「きらきら星」やパッヘルベル作曲の「カノン」を扱い、個人演奏に取り組む。誰もが知る「きらきら星」の旋律を構成する音を探したり、旋律を演奏したりする活動を通して、調やギターについての基礎的な知識を得たり、奏法と音色の関連について意識したりして、ギターの器楽表現に親しみ、本題材の学習の基礎とする。その後、生徒が相互に自らの知識を持ち寄り新たな知識を生む知識構成型ジグソー法を用いて、ギターの奏法と音色との関連について実感を伴った理解につなげる。このように、生徒の気付きを促しながら、技能の習得へとつなげていきたい。

第２次では、第１次で習得した奏法を生かし「カノン」の旋律を演奏し、第３次のアンサンブルの学習につなげる。その際、題材の学習後もギターに親しめるよう、五線譜やTAB譜の読譜と記譜の指導も含めて扱うこととする。

第３次では、「カノン」を聴取し、「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受して、知覚・感受した内容を基にギターアンサンブルの表現を創意工夫する。具体的には、「テクスチュア」の働きを感受することで、他者との調和を意識して演奏する技能の習得へつなげ、「形式」を知覚することで、表現形態の特徴を生かして演奏する技能の習得へとつなげる。このように「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受によって、技能習得の視点や創意工夫の視点を持ち、具体的な指示や助言がない段階でも、主体的に学習に取り組み、自己のイメージを持ってギターの演奏やギターアンサンブルを創意工夫して演奏する学習とする。

５　指導と評価の計画

時間	学習目標	学習活動	評価規準及び【評価方法】
第１次 ３時間	○クラシックギターに親しみ、その音色の特徴を感じ取る	○「きらきら星」の旋律の一部を演奏し、クラシックギターに親しむとともに、任意の音から音を探りながら演奏することで、様々な音の高さ（調）で演奏ができることに気付く ○「きらきら星」の旋律を５弦３フレットから演奏をする条件を加え、グループで演奏をし、同じ音でも異なる弦やフレットで演奏できることを理解し、その音色の特徴を感じる	主① 【ＷＳ】【観察】
	○様々なギターの種類と音色について理解する	○クラシックギター、フォークギター、エレキギターを見たり触ったりして、形状や音色の違いについて考え、理解する	知① 【ＷＳ】【観察】
	○「きらきら星」を演奏する上でより良い音色を出すための奏法を見つける	○知識構成型ジグソー法を用いて音色と奏法の関わりについて考える ○グループごとに再度「きらきら星」を演奏し、それまでの音色との変化に気付き、クラシックギターらしい音色を理解し、その奏法を習得する	技① 【ＷＳ】【観察】
第２次 ２時間	○音階や「カノン」に取り組み、曲にふさわしい奏法、身体の使い方などを身に付け、工夫して演奏する	○「きらきら星」を構成する音からハ長調の音階を導き、TAB 譜やダイヤグラムなどの楽譜を理解する ○グループで話し合いながらハ長調やニ長調の音階を TAB 譜に記譜し、音階の特徴について理解する	主① 【ＷＳ】【観察】

		○アポヤンド奏法とアルアイレ奏法の違いを理解し、奏法を選択し、「カノン」の旋律を演奏する ○「カノン」の旋律を演奏する際に弦を弾く位置を考える ○グループの中で「カノン」の発表を行い、奏法と音色の関係について気付いたことを記入する ○「カノン」の発表をする	技① 【演奏】
第 3 次 3 時 間	○表現形態の特徴を理解し、他者との調和を意識しながら自己のイメージをもって「カノン」を演奏する	○「カノン」の原曲を聴取し、形式の働きを感受し、カノンという楽曲の形式について理解する ○通奏低音部分と旋律部分を同時に演奏し、音の重なりを感じる ○アンサンブル活動を通し、楽曲の冒頭から後半にかけて、楽曲にどのような変化が生まれるか理解する ○ワークシートに書いた内容を共有し、「カノン」について理解を深め、どのような演奏を目指すかグループごとに明確にする ○２グループ間で互いに聴き合い、よいと思った点を記入する ○これまでに得た知識や技能を生かし、どのように演奏したいかグループとしての創意工夫を発表して「カノン」を演奏する	思① 【ＷＳ】【観察】 主① 【観察】 知① 【ＷＳ】 思② 【ＷＳ】【観察】 主① 【ＷＳ】【観察】 技① 【演奏】

Ⅱ　本時の学習指導

１　主　　題

「カノン」の特徴を理解しよう（第６時／全８時間）

２　目　　標

「カノン」の特徴について理解し、アンサンブルをする

３　本時の評価規準

思考・判断・表現	②「カノン」の形式、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受している。
主体的に学習に取り組む態度	①音や音楽、音楽文化と豊かに関わり主体的・協働的に表現の学習活動に取り組もうとしている。

４　指導方針

前時まで演奏をしていたカノンについての知識を問うことで、演奏を聴く時の視点を持たせる。旋律が繰り返されていることや、通奏低音が最後まで繰り返されていることに気付けるよう、音源に合わせて演奏をする。

５　使用教材・機器

授業用プリント、ギター、「カノン」のＣＤ

６　展　　開

時間	学習内容	学習活動	支援及び指導上の留意点	評価規準及び【評価方法】
導入15分	○前時までの復習をする ○カノンについて考え、本時の課題を共有する	○音色や奏法に留意して「カノン」の旋律を演奏する。 ○カノンという言葉について知っていることをクラス内で共有する ○原曲の演奏を聴き、気付いたことを記入し、共有する ○教師の説明によって、カノンの定義を知る	・グループやクラス内で共有しつつＡやＢの旋律が何度か繰り替えされているという意見を取り出し、次の活動へ繋げる ・ＡやＢの部分が何度か繰り返され、その中で曲がだんだんと変化していることに気付けるようにする ・この際、「かえるの歌」などを例示し、歌唱するなどして、実感をもった理解を促す	
	（定義）複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する形式の曲			

展開 30 分	○「カノン」の形式について実際演奏して確認する ○「カノン」の通奏低音について考える	○「カノン」のB-1とB-2を重ねて演奏し、気付いたことを記入し、共有する ○再度聴取し、B-1やB-2の部分がどこまで演奏されているか理解する ○通奏低音はB-1やB-2の部分とは異なり、常に繰り返されていることに気付き、TAB譜を基に演奏をする ○B-1、B-2、通奏低音にパートを分けて、重ねて演奏を行い、気付いたことを記入し、共有する	・聴くことが難しい場合、演奏する生徒と聴く生徒を分ける ・聴取しながらB-1やB-2を自由に繰り返して演奏させたり、B-1やB-2以外にはどのような音が鳴っているか注目させたりする ・グループで練習する時間を確保し、全員が演奏できるようにする ・B-1、B-2のみを重ねたときとの違いに気付けるようにする	主① 【観察】 思② 【ＷＳ】【観察】
まとめ 5 分	○本時のまとめとして「カノン」を演奏し、次時の学習の見通しを持つ	○共有したことや声部の重なりに注意し、演奏する ○今後のアンサンブル活動の見通しを持つ	・「カノン」のギターアンサンブル用の楽譜を配布する	